

教師の感情規則に関するノート ～Word Minerを分析ツールとして～

佐々木 誠 ・ 菊池 章 夫

Notes on the Feeling Rules Held by Junior High School Teachers

Makoto Sasaki and Akio Kikuchi

Thirty-two junior high school teachers were interviewed on their images for ideal teaching. Their tape-recorded data were analyzed by Word Miner. Four clusters were emerged and were interpreted meaningfully as active relationship, psychological weakness, activation of interest, and aspiration. Two axes, orientation and personality factor, were valid in terms of 4 clusters and MBI scores. As shown in Figure 1, second cluster was separated to other clusters. Those results were discussed in relation to feeling rules in school.

1. はじめに

筆者(佐々木 2003, 佐々木・細江 2004)は、教師のストレスと対処のモデル作成を目的に、岩手県内の中学校教諭(講師を含む)32名を対象に面接調査を行った。データは、延べ13時間にのぼる録音時間となり、その全てはテキスト型のデータとして書き起こされた。

1回の面接におけるデータは、3つの部分に分かれている。前半は、被面接者である教師が、それまでの教師生活に起こった出来事と対処について自由に語っている部分である。対象教師は、それまでの教師生活を振り返り、1つの物語になるように順を追って話すように促されている。語りの間、面接者は質問を避け、教師が自由に最後まで語れるように配慮されている。中盤は、面接者が前半を受け、半構造的に教師に質問をしながら進行した部分である。終盤は、面接者があらかじめ準備した質問に、教師が答えている部分である。終盤では2つの質問を中心に面接が進められている。1つは「理想とする教師との出会い」について。もう1つは「これからどんな先生になりたいか」についてである。データの前半部分は、佐々木(2003)の研究において分析されている。しかし、中盤と後半の

部分は分析対象とはされておらず、手付かずのままであった。そこで、今回は「これからどんな先生になりたいか」という部分について分析を加えることで、何がしかの知見を明らかにしたいと思う。

2. データについて

1) 調査期間：2003年7月～2003年10月

2) 調査対象：岩手県内の中学校教師32名。男性22名、女性10名、教職経験年数平均14年(最低1年、最高40年)

3) 調査方法：面接者の知人をインフォーマントとして、その学校にいる教師を紹介してもらう。面接では、本人の承諾を得てICレコーダーに録音し、録音されたデータはワープロで書き起こされた。

4) 面接時間：およそ20分から2時間まで。業務時間内に行なわれた場合は、校長先生の許可をいただいている。業務時間外に学校を訪れて、知人に会うという形で面接が行われた場合もある。他に、学校外での面接が1ケースある。

5) 面接時に収集された他のデータ：面接に先立って描画データ、バーンアウト尺度の記入を行なった。

描画データは、“大変だった度合い”を縦軸に、“時間(年単位)”を横軸に教師自身がグラフを記入した

ものである。今回の分析には用いない。

<バーンアウト尺度>

バーンアウトを測定するためにMBI (Maslach Burnout Inventory; Maslach & Jackson 1986)を参考に、新井(1999)が作成した尺度を使用した。MBIには、下位尺度として“情緒的消耗感”“脱人格化”“個人的達成感の減退”があるとされる。久保(2004)は、マストラック、ジャクソンとレイター(1996)の定義を紹介している。それによると、“情緒的消耗感”とは、「仕事を通じて、情緒的に力を出し尽くし、消耗してしまった状態」であり、“脱人格化”とは、「サービスの受け手に対する無情で、非人間的な対応」であり、“個人的達成感”とは、「ヒューマン・サービスの職務に関わる有能感、達成感」と定義されている、としている。

3. 分析方法

今回の分析では、より客観的な分析を行いたいと考え、テキスト型データの分析に対応しているコンピューター・ソフトWord Miner (日本電子計算機株式会社)を使用することとした。

1) Word Miner

Word Minerは、テキスト型のデータと、性別や尺度得点などを同時に分析することができるコンピューター・ソフトである。長文を文節に分解する“分かち書き”機能や、単語を探すだけでなく、文脈を示すために検索語の前後を表示する機能などがある。また、出現頻度から成分値や固有値を求め各種の分析を行なうことができる。分かち書きされた言葉 (Word Minerでは“構成要素”という)のクラスター化や、尺度得点をグループ化して図示する機能などがある。使い方によっては尺度作成などに十分役に立つソフトである。

2) 分かち書き・キーワード

“分かち書き”機能は、長文を助詞、記号、単語などに分解する機能である。Word Minerでは、分かち書きされたデータは“構成要素”と呼ばれる。今回のデータは訛り表現があったため、出来る限り標準語になおしてから分かち書きを行った。分かち書きと同時に、助詞や記号などを除いた“キーワード”というデータも自動的に作成される。今回は、こちらの“キーワード”データを編集し分析を行なった。

3) データの編集

「ジャージ」と「運動着」のように、同じものではあるが、別のものとして分かち書きされる場合がある。このような場合、“置換辞書”という変換を指定する語の一覧を作成し、語を統一することができる。同様に、削除したい語を指定して“削除辞書”という一覧を作成することができる。これによって、分析対象外としたい語を指定することができる。削除辞書には、あらかじめWord Minerに装備されている辞書(記号、助詞などを指定しているもの)と、ユーザーが自由に設定できる辞書の2種類がある。

4) 多次元データ解析

構成要素(分かち書きされた言葉)から語群を形成する機能“クラスター化”がある。クラスターの図示と同時に、尺度得点によるグループを同時に図示することができる。今回はMBIの得点によるグループの布置を同時に示すことにする。また、今回は元になるデータの数が少ないので、できるだけはずれ値は考慮せず、すべて使うようにする。

4. 結果

分かち書きによって、記号や助詞などを含む989種類の構成要素によるデータが作成された。その中から同時に、記号や副詞などを除いた421種類の構成要素によるキーワードデータが作成された。データは様々な言葉が混在していた。そこで今回は、分析を明確にするために、感情に関する語にしばって分析することとした。さきほどの機能の説明で述べたように、削除したい語の一覧(削除辞書)を作成し編集を行なった。削除辞書によって394個の構成要素を対象外とした。また、置換辞書によって、8個の構成要素を7種類の構成要素に置換した。置換した内容は次のとおりである。括弧内は置換する前の構成要素である。

<置換した語>

一生懸命(一生懸命生徒)・気持ち(気)・嫌な(嫌な先生)・情熱(情熱ど)・情熱(情熱的)・好き(すぎ)・陰悪(ケンアク)・熱血(熱血漢)

この結果、削除辞書と置換辞書によって残された31語を分析対象とした。次に、MBI尺度の下位得点によるグループ化を行なった。3つある下位尺度のそれぞれの平均点によって高群と低群に分けた。3つの下位尺度が高低の2群に分けられるので、全体は8群に分けられた。表記では、高群に“H”、低群に“L”

をあて、下位尺度の“情緒的消耗感”“脱人格化”“個人的達成感の減退”の順に表記することとした。つまり、HLHとあれば“情緒的消耗感”は平均より上、“脱人格化”は平均より下、“個人的達成感の減退”は平均より上の人たちとなる。このグループ群と構成要素の出現頻度等との解析によって、構成要素全体に対して4つのクラスターが得られた。クラスターに関する値を表1に示す。

表1 構成要素のクラスター別統計値

	クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4
構成要素	やる気	キレル	興味	素敵
	エネルギー	弱さ	大切	
	ポジティブ	精一杯		
	一緒			
	一生懸命			
	気持ち			
	嫌な			
	険悪			
	好き			
	思い上がり			
	失礼			
	情熱			
	人間的			
	前向き			
	尊敬			
熱血				
必死				
クラスター内変動	1.2009	0	0	0
クラスターサイズ	17	3	2	1
構成要素数	32	3	2	1
距離	1.0854	9.5	19	38
成分スコア1	0	0	-1.8911	-5.5541
成分スコア2	1.006	1.0731	0	0
成分スコア3	0	0	3.9273	-2.6744
成分スコア4	0.2663	-2.8404	0	0
成分スコア5	0.0456	-0.4869	0	0
成分スコア6	-0.0195	0.2083	0	0

構成要素の種類がクラスター1では17種類、クラスター2では3種類、クラスター3では2種類、クラスター4では1種類となった。次に、図示であるが、6つある成分スコアの中で、各クラスターが比較的散在し特徴を示しやすいと思われる組み合わせを採用することとした。結果として、横軸を成分スコア3、縦軸を成分スコア4とした。それを図1に示す。図の中で、丸で囲んだ数はクラスターを示しており、太字のアルファベットはMBI下位尺度得点によるグループを示している。

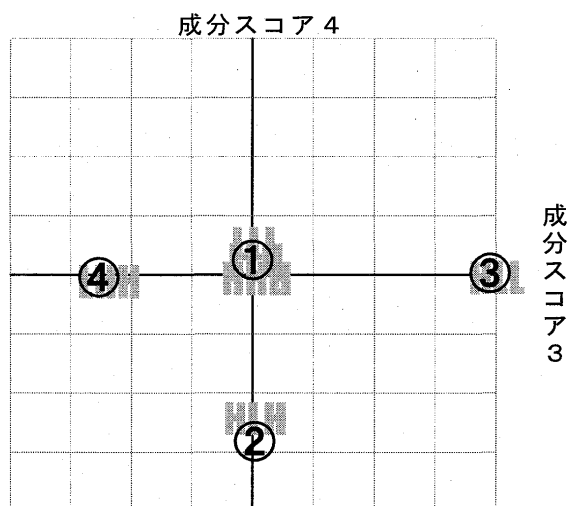


図1. 構成要素クラスターの成分スコア布置図

図を見てみると、クラスター1は原点付近に、クラスター2はy軸（成分スコア3）上の負の位置に、クラスター3はx軸（成分スコア4）の正の位置に、クラスター4はx軸上の負の位置にある。クラスター2の位置にはHLH群がほぼ重なっており、クラスター3の位置にはLLL群が、クラスター4にはLHH群が、残りの群はクラスター1の位置にほぼ重なっている。

5. 考察

1) 各クラスターの意味

ここで得られた4つのクラスターの意味について、表2-1から2-5に示したような教師たちの語りに戻って考えてみる。クラスター1は、ほぼ原点の位置にあり、2つの軸（成分スコア）に共通のクラスターと考えられる。そこで、このクラスター1の構成要素には2つの意味合いが含まれていると考えられる。1つは表2-1に示したように、「やる気・前向き・ポジティブ・一生懸命・熱血・情熱・思い上がり・必死」からなる意味合いで、これは自己における内的な感情や、感情を規定するものと言える。これらの言葉がどのような文脈で語られているのか見ると、積極的に活動したいという教師としての願い、あるいは、教師というよりも欠点も併せ持つひとりの人間として生徒や同僚に接していきたい、という姿勢も見られる。教師としてどのようなスタイルでいけばいいのかといったような教師像が伺える。使用されていることばの意味合いなどから、これらのグループを“積極性”と呼ぶことにする。

表2-1 クラスター1に関する語り(1)

あいつに言われれば <u>やる気</u> にさせられんだよなぁみたいな教師に
前向きで <u>ポジティブ</u> でいかにも先生で、とっても健康的な思考の持ち主にもなりたいたいと思う
この歳だから何かこうできるものを <u>一生懸命</u> やっていきたい
<u>熱血漢</u> ですよ。自分の教科に対する指導の <u>情熱</u> とかそういうのは、卒業して大人になってから、あ、こういう先生いいんだなと、分かったっつうかそう思えてきて
先生だから絶対間違わないっていうふうに、 <u>思い上がり</u> を持たないように、
あるような気がして <u>必死</u> 、ただがむしゃらにっつうか、猪みたいにとにかく突っ走る時期

クラスター1の残りは、「エネルギー・一緒・気持ち・嫌な・険悪・好き・失礼・人間的・尊敬」である。これらは、語られている文脈からみると、相手との間に起こる感情や、それを規定することに関係したものが集まっている。表2-2に示した語りの中では、一見ネガティブな表現に感じられる言葉も、それはすべてを共感しあって、裏表のない心からの関係という意味合いで用いられている。あるいは、生徒や同僚とのよい関係を持ちたいという教師の交流のスタイルに関する願望を表している。先ほどの“積極性”は、その教師自身がどうありたいかということに関するものであったのに対し、後半は情緒的なやりとりという点に

表2-2 クラスター1に関する語り(2)

子どもたちから <u>エネルギー</u> をわけてもらって普段がなばれている
生徒と <u>一緒</u> になって、向き合える先生
時代は変わってもやっぱり人間てそんなに根本的に変わらないだろうから、そ、 <u>気持ち</u> だけでも伝えていきたいなあってそんな教師でありたいなと
生徒を傷つけてんじゃないかなあ、なんか <u>嫌な</u> 先生になってんじゃないかなあ
色んな事を見なきゃと思ってます。ま、それでもちょっと <u>険悪</u> になるんですけども。なるべく細かく先生方、動く人の立場にたって見たり
やっぱり自分は子ども <u>好き</u> だし、とにかく子どもに <u>好かれたい</u> 人間になりたいと思いますね。
いじめられてるって言えば <u>失礼</u> ですけど、あの、冷やかされたりとかです
自分もそれをやることによって多分 <u>人間的</u> に成長したりとが、ちょっとは社会に貢献できたり
職場の中で言うと、んー、年下の先生から <u>尊敬</u> される先生になりたいなって思いますね

関したものである。これらのことから、後半の残りの部分を“人間的やりとり”と呼ぶことにする。

結局、クラスター1では、教師が日ごろの生活で望んでいる、あるいは心がけている積極性や人間的やりとりに関する言葉が集まったと言えるだろう。また、クラスター1の構成要素の数は17で最も大きい。そういう意味で、クラスター1は基本的であり、“人間的やりとり・積極性”と呼ぶことができるだろう。

クラスター2について考察する。まずクラスター2の位置は、原点(クラスター1)からみてy軸上の負の方向にある。表2-3に示した内容を見ると、「キレル・弱さ・精一杯」という要素で構成されている。これらの言葉に関する語りを見ると、ネガティブな部分であり、望ましい生徒像、あるいは教師の理想像、対人的スタイルとしては受け入れがたいが、そういう部分も認めているという意味合いで語られている。これらの語りからは、指導での行き詰まりや、日常生活の忙しさからの余裕の無さや、自分の弱い所も学校では出して欲しい、本音で付き合いたいといったような、切迫感や精神的に追い詰められ状態がうかがえる。そういう意味で、このクラスター2は“人間的弱さ”と呼ぶことにする。

表2-3 クラスター2に関する語り

昔はすぐ何かあったらブチッと <u>キレル</u> ようになんか怒ってた時もあった
<u>弱さ</u> とか、こう醜い面を出し合ったりとか、そういうのをまっお互いに受け止めながら
その日その日で <u>精一杯</u> だから、そういう事を考えたことがない

次にクラスター3を見てみる。クラスター3の位置は、x軸上の正の方向にある。クラスター3は「興味・大切」が含まれている。これらの言葉に関する語りを元のデータで見ると(表2-4)、興味のもとになっているということ、あるいは生徒に自分の教科に対する興味を持って欲しいということが語られている。そこでクラスター3を、“興味の喚起”と呼ぶことにす

表2-4 クラスター3に関する語り

英語に <u>興味</u> があって、英語を喋りたいなあって思わせられるような学校の先生になりたい
国際化とかそういうような事が <u>大切</u> になってくるので

る。

クラスター4は、「素敵」のみで構成されており、原点からx軸の負の方向に位置している。このクラスター自体はズレ値の可能性もあるが、今回はももとのデータ数が少ないので、このクラスターも含めて解釈の対象とする。この言葉に関する元の語り（表2-5）の中では、それほど強くなく、明確な形を与えるようなものではない意味合いで語られている。気分的な、その理想像に付随するイメージに対する感情であって、もしも理想の自分であると思えたときには、そのような感情をもてるかもしれないという意味も含んでいそうである。こういう意味でこのクラスターを“あこがれ”と呼ぶことにする。

表2-5 クラスター4についての語り

高校のときにあのごく 素敵 な先生が居て、その先生みたいになりたいなっていうのがあって

2) 軸の解釈

次に軸の意味を考えてみる。これはつまり成分の3と4が何を表しているのかということである。このことについて、軸上にあるクラスターの内容から考えてみる。まず、x軸（成分スコア3）から考察する。x軸上にクラスター3とクラスター4があり、クラスター1がこれに近似した位置にある。この3つに共通したものはなんだろうか。

1つめの“あこがれ”は、動機にはなっているがやや弱く、理想となる対象に対して抱く気分的なものである。そういう点で、やや自己からの距離を感じるものである。

2つめの“興味の喚起”であるが、相手にこうなってほしいという願い、また、相手に変容を求める根拠が、自分の外に存在しているという明確な理由がある。例えば、社会の要請としてそれが必要だというような強さがある。

3つめの、“人間的やりとり・積極性”は、自分が教師としてこのようなスタイルで行動したいとか、対人的な場合で感じるものはかくありたいというように、自分、あるいは他者との関係でどう感じたいのかという願いであるという点で動機となりうる。しかも、主観的であり、他の2つの中間の強さと考えることもできるであろう。

これらのことから、3つには動機あるいはその感情

が引き起こされる対象の距離という要素が共通している。 “あこがれ”は、もしもという可能性の範囲に、“人間的やりとり・積極性”は自己の主観的な範囲に、“興味の喚起”は外に、という具合にある。そのような意味を考えると、x軸は“志向性”を表しているのではないと思われる。

次に、y軸について考察する。y軸には“人間的やりとり・積極性”と“人間的弱さ”が乗っている。“人間的弱さ”とつながっているのは“人間的やりとり・積極性”の中では、“人間的やりとり”に関する言葉と考えるのが妥当であろう。それを受けて“人間的弱さ”では「キレル」「精一杯」といったような精神的に追い詰められている状態がうかがえる。したがってy軸は“性格的弱さ”を表していると考えられる。そう考えると、y軸の低い位置にクラスターがあるのは、理想としての“人間的やりとり・積極性”に対して、余裕をなくした教師がそこから外れ脆弱さを表しているような、まるでバーンアウト的な状況にいるような印象をうけ、興味深い。

3) MBIグループの布置

布置図（図1）に太い字のアルファベットで載せてあるMBI下位尺度得点によるグループの位置について考察する。特にここでは、原点から離れた特徴的な3つのグループについて述べる。この布置図では“人間的弱さ”に近いところにHLHグループがある。情緒的消耗感と個人的達成感の減退が平均以上で、脱人格化は平均以下のグループである。このグループは、情緒や達成感という内面では切迫しているが、表面的な行動にまでは現れていないという点で、人間の内面における弱さが良く出ているのではないだろうか。

LHHグループは“あこがれ”のそばにある。これは“あこがれ”のところでも述べたように、対象との距離を適当にとっており、その結果、情緒の消耗は低いと考えられる。また、距離をとっているがために対象に対する冷たい態度（脱人格）や、個人的達成感の減退が高く出ているということを現しているのかもしれない。

x軸上でその正反対にあるのがHLLグループである。情緒的に消耗しているがために、外的なものに自分の行動の根拠を求めているのかもしれない。あるいは、外的なものへ自己を適応させるときの心的な疲労の表れとも考えられる。脱人格化や達成感の減退の度

合いが低いのは、外的な（例えば規範のような）ものに合致しているかどうかという判断基準の分かりやすさから、負担が少ないとも考えられる。

6. 感情規則について

クラスター1“人間的やりとり・積極性”の分析を見ても分かるように、教師は人間的やりとりや積極性について「一生懸命」「好き」「思い上がり」といった言葉で、教師としてのイメージを作ろうとしている。このイメージは、学校という場で、自分が思っているような教師になっているかどうかの基準となり、行動を規定する。感情に絞って考えると、このような場面ではこのような感情がふさわしいといったルールのような役割を果たしているとも考えられる。例えば、授業では、子どもが“情熱”を感じられるようにするのが教師なのである、といったようにである。また、生徒を指導する場面では“思い上がり”を自分が感じていないか、あるいは相手にそのような印象を与えていないかということが、1つの点検項目になるわけである。

これらはホックシールド（1983；石川・室伏訳2000）の感情規則に相当する。彼女によると、感情規則は「感情を統制する権利・義務の意識を作り上げる」もので具体的には「感情に関する規則、道徳的スタンス、役割」などを指し、それだけでなく「タイミング、量、場所」の要素も含むという。例えば、子どもと接するときは怒りではなく、親切さを用いるべし、という感情規則を持っている教師がいるとする。そこで、放課後に教師が特別授業を行なったのに、生徒は集中せず失礼な態度をとり、教師は怒りを感じたとしよう。このように実際に感じる感情と感情規則が異なるとき、この教師は心から優しさを感じられるように努力することになる。無理をして、表面的な演技、あるいは心からそう感じられるような演技をするのである。まだ子どもだからとか、自分の指導が悪いからだといったように、自分にいきかせ、心から優しく接するようになるのかもしれない。教師が行なった好意に対し生徒からの敬意の量が少なかったという不釣合いの代価は給料によって賄われると考えられ、それはまさに“感情労働”（ホックシールド 1983）である。特に、サービス業の場合、感情規則は実際に感じる感情よりも優先される。

さて、このようなことが続くと、この教師は自己の

率直な感覚としての怒りを場違いなものとして信じられなくなる可能性がある。自分が自分から疎外されていき、ひいては、自分の感情にアクセスすることができなくなる。そういう状態がバーンアウトであるとホックシールドは言う。

また、感情の管理が市場原理に持ち込まれたとき、感情規則は、職員研修や、上司や同僚との会話から、明に暗に管理されているとも述べている。実際、多くの教師が、転勤直後はカルチャーショックをうけるが、しだいに慣れていくと語っている。慣れるとは、感情規則も含め、その学校の文章にできない雰囲気とか暗黙の了解に適応したということではなからうか。感情規則は書き換えられ、変化していくものである。

今回の分析との関係で述べると、教師が感情規則を語るときには、基本となるクラスター1について語るということ。つまり、“人間的やりとり”と“積極性”という切り口で語られるであろう、ということである。

7. 残された問題など

今回の分析についてまとめると以下のようになる。Word Minerによって、「どんな教師になりたいか」という語りを分析した結果、4つのクラスターが得られた。それらはそれぞれ“人間的やりとり・積極性”“人間的弱さ”“興味の喚起”“あこがれ”と名づけられた。また、“志向性”と“性格的弱さ”と考えられる軸上に配置されていると考えることによって、分析が深められた。最後に、教師の感情規則について“人間的やりとり”と“積極性”というカテゴリーが示唆された。

データ数については、対象者の数が32名・分析対象語数が31語と少ないことがあげられる。Word Minerでは言葉の出現回数が分析の要因となっている点を考慮すると、より客観的な結果を求めるとすれば、データ数を増やした分析が必要である。

分析対象の語りについては、「どのような教師になりたいか」という答えに「ない」「考えられない」といった返答が複数あったことがあげられる。しかし、今回は感情を規定すると思われる語を分析対象としたので「ない・考えられない」という語は分析対象外である。この「ない・考えられない」といった教師のうち1人は転勤して間もなくであり、1人は担任を外れ教師を指導する立場に変わったケースであり、もう1人は翌年退職している。「ない・考えられない」と答

えた教師の感情についての分析もできれば、興味深かったであろう。

最後に、今回は、Word Minerのクラスター化機能を使って分析を試みたが、このソフトには他にも検定機能などが装備されており、クラスターの中でどの語が影響力が強いのかといったことを分析することができる。今後、このソフトの操作や分析の原理を熟知することによって、より範囲の広い、柔軟な分析が可能であると思われる。

文 献

新井肇 1999 「教師崩壊」 すずさわ書店

Hochschild, A. 1983 *The Managed Heart* :

Commercialization of human feeling, The Regents of the University of California (石川准・

室伏重希訳 2000 「管理される心ー感情が商品に

なるときー」 世界思想社)

久保真人 2004 「バーンアウトの心理学ー燃え尽き症候群とはー」 サイエンス社

Maslach, C. & Jackson, S. E. 1986 *Maslach Burnout Inventory Manual*, 2nd ed. Consulting Psychologist Press.

Maslach, C., Jackson, S.E., & Leiter, M. P. 1996 *The Maslach Burnout Inventory* (3rd ed.). Consulting Psychologists Press.

佐々木誠 2003 教師のストレスとその対処の質的研究ー中学校教師の語りよりー 岩手県立大学大学院 社会福祉研究科 修士論文 (未発表)

佐々木誠・細江達郎 2004 教師のストレスとその対処の質的研究ー中学校教師の語りよりー 岩手フィールドワークモノグラフ 6号 1-26 岩手フィールドワーク研究会 岩手県立大学